

社会学と疫学



随 筆

厚 東 洋 輔*

Sociology and Epidemiology

Key Words : sociology, epidemiology, self-fulfilling prophecy, Japanese Society

専門が異なる人との交流は実に大切である。

私の専攻は「社会学」であるが、日本における最初の「学際的学部」である「大阪大学・人間科学部」に長らく奉職させて頂いたのはまことに幸せであった。他の分野の専門家の方が、雑談の中でふと漏らす片言隻語に蒙を啓かれることを何回も経験することが出来た。その中から思い出話を一席。

親しくして頂いていた医学部出身の教授が、自分の後任人事に触れて「新しく来てくれるのは、『疫学』を専門とする人だから、おまえら社会学者と話しが合うだろう」

と言われたことがある。この言葉をお聴きしたとき、若干腑に落ちないところがあった。私の理解では、「疫学」というのはコレラの蔓延の阻止で名をあげた由緒ある学問といったイメージであり、この先入見から、先きの発言を「社会学者」のあり方に対する先生一流の「警句」として受け取った。

しかしその後「疫学」の研究フィールドが、疫病から健康へ、急性疾患から「生活習慣病」へと展開している有様をようやく知るに付け、まことに「至言」だと、感銘するに至った。というのも社会学は、疫学に類似したロジックを駆使する学問だからである。

1. まず第一に、立証しようとする命題が類似している。

例えば「公立高校よりも私立高校の方が『一流

大学』に進学できるチャンスは大きい」。「BMI [ボディ・マス・インデックス]の値が25を超える人は、『成人病』に罹患するチャンスは大きくなる」。

2. 第二に、こうした命題が「真」として出現する確率が3割を越えるようになると、学界等でその真偽を巡る議論が高まり、関連したり相反したりするさまざまな知見も披瀝されるようになる。

3. 第三に、こうした命題が人々の間に普及し、良く知られた「知識」になる頃となると、相関関係と因果関係の混同が見られるようになる。

例えば、私立高校に入学すると[原因]、「一流大学」に進学できる[結果]：「一流大学」に入学するには「私立高校」に進学することが必要だ。

「疫学」あるいは「社会学」の知見が、人々の間に「知識」として流布するのは、それを専門としている者にとっては喜ばしい事態であるかもしれない。しかし、長い間「社会学者」をしていると、そうとばかりは言えない事態に直面することも多い。こうした「知識」が、私たちが生きる上で「良きもの」となるか、そうではなく「悪きもの」になるのかは、知見の言表される「場」、あるいはそれを「知識」として受け取る「社会」のあり方が、分岐点をなしにしているように思われる。学問的知見を活かすも殺すも「社会」次第だ、というのが今の私の考えである。私たちの暮らしている「日本」は、一体どのような特質を備えた「社会」なのか。司馬遼太郎は印象的な観察を残している。

「・・・日本人の、流動していくものに対する受け入れ方の寛容さ、あるいは受け入れるということに対する積極的な姿勢、感覚なんですが、私たちが子どもの頃にも、昨年までベイゴマだったのが、今



* Yousuke KOTO

1945年9月生
 東京大学文学部社会学科卒業 (1970年)
 1974年東京大学文学部助手
 1975年大阪大学人間科学部専任講師 同
 助教授・教授を経て2009年退職
 大阪大学名誉教授 博士(人間科学)
 社会学 (理論社会学・社会学説史)
 TEL : 072-693-3008
 FAX : 072-693-3008
 E-mail : koto5928@yahoo.co.jp

日からはベッタンがはやるんですね。……」

(『手掘り日本史』)

「流動していくものを積極的に受け入れようとする感覚」——こうした感覚から「バスに乗り遅れまい」とする精神、勝者は誰であるかをいち早く見抜き、勝者に追隨していこうとする気質が生まれ得るのであろう。

こうした特性の社会において、例えば「公立高校よりも私立高校の方が『一流大学』に進学できるチャンスは大きい」、という命題が発せられたらどうなるのか。大学進学を志す中学生・保護者・先生たちは、一斉に「私立高校」に進学しようと努力するであろう。「私立高校」に首尾よく入学できたものは、自分は「一流大学」に連なるエスカレーターに乗れた勝組として、気分よく高校生活を続けることが出来るだろう。それに対して、「難関私立高校」の入学試験に失敗したり、あるいは他の事由から「公立高校」へ進学したものは、意気阻喪していることだろう。自分は「落ちこぼれ」の存在として卑下して、悶々として日々を過ごしているかもしれない……。高校生活をこうした心境で三年間続けるとしたらどうなるのか。意気軒昂な「難関私立高校」生は、大学受験に成功し無事「一流大学」に入学することが出来、他方、意気阻喪した「公立高校」生は、大学受験に十全たる力を発揮することが出来ず、「一流大学」には入学できない、という事態が生起する可能性が高いだろう。

初発の命題：「公立高校よりも私立高校の方が『一流大学』に進学できるチャンスは大きい」の出現する確率は、この命題が「発見」された当初は3割程度だったかもしれないが、時間の経過とともにどんどん上昇の一途をたどり、5割を超す勢いを示すようになるかもしれない。最初にこの命題を提唱した研究者は、「真理」を発見した名誉ある存在として遇されているかもしれない……

こうした一連の「思考実験」は、社会学者にとってはおなじみのものである。「難関私立高校」出身者によって「一流大学」が占拠されるという事態が現出した場合、当初の命題が「真」であることの確証と受け取るよりは、むしろ「予言の自己成就」という命題が合致した事態と規定するのが、社会学の常套であろう。

事態の出発点となった「命題」が「真」であるが故

に、命題通りの事態が生起したのではない。当初にあったのは「予言」であるにすぎない。それは予言する者の願望や予断・憶測を述べたものに過ぎず、検証作業にかけてみれば、リアリティーに合致していないと判定されるのが普通である。こうした必ずしも「真」ではない「予言」が、人々によって「知識」として受け取られると、それを契機に初発の言表に合致した事態が生起するようになった。つまり当初の単なる「予言」が学術的な「命題」という体裁を事後的に纏うことが可能になったのである——これが社会学で言われている「予言の自己成就」の意味である。

司馬遼太郎の描き出すような日本社会の特質は、こうした「予言の自己成就」がきわめて起こり易い社会である、と言えるだろう。

「社会学」に従事するものは、自らが活動している「場」の特性をよくよく自覚していることが大切だろう。ある社会現象も、それが社会学的研究の俎上に載せられるや否や、一大流行現象として一世を風靡するという「思わざる帰結」を身にまとう場合がある。そうした場合、当初の社会現象が健康なものであったとしても、「ハヤリ」になることにより、＜急性疾患＞＝「疫」という性質を帯びてしまう。社会学者は、おのれの取り扱う研究対象を「疾患」（急性あるいは慢性の）と見なす傾向がある、自らがよってたかって作り出したものであるにもかかわらず。「社会学と疫学」の相同性を述べた教授の先の言葉を、私が当初「警句」として受け取ったのは、社会学者にはこうした性癖が確かに存在するからである。

さて議論を一步進めて、「公立高校よりも私立高校の方が『一流大学』に進学できるチャンスは大きい」という命題を、「一流大学」の側から見直してみることにして。高校進学に当たり、こうした命題を（唯一の）根拠として、学校選択が行なわれているとすると、こうした事態は「一流大学」にとって望ましい事態といえるであろうか。

「公立高校」ではなく「私立高校」を選ぶのは、そうした方が＜確実に＞「一流大学」に進学できるからである。それは一種の安全志向のなせる業である。失敗しないように、目的達成の確率の高い選択肢を、比較考量の結果選び取るような人生設計のあり方を、頭から否定することはもちろん出来ないだろう。し

かし選択を主導している動機が、大勢順応への構えであり、保守的な精神であることもまた見落とすことは出来ない。もしも「一流大学」における「一流」というレイベリングが、独創性・創造性・オリジナリティーを（唯一の）根拠とするものであるとすれば、こうした精神の持ち主は、決して「ウェルカムな」学生とは言い難い……。

「公立高校よりも私立高校の方が『一流大学』に進学できるチャンスは大きい」という命題が、事実在即さず虚偽であるところに問題の根があるのではない。虚偽の言表＝嘘を、学問的体裁を整えることによって、真実として言いくるめるところに、社会学的命題の「怖さ」があるのではない。問題の根は、その受け取り方にある。その「命題」からどのような「知識」を構築するかが、注意深く顧みられてしるべきである。

「昨年までベイゴマだったのが、今日からはベッタンが流行る」——こうした日本社会においては、「ハヤリ」をいち早く認識すること、さらにまた「ハヤリ」を誰よりも早く身にまとい現実化すること、こうした業はそう難しいわけではない。最大の難問は、新しい事柄を、「ハヤリ」ゆえではなく、その事柄の真実に即して認識し、主体的に選び取るところにある。社会事象に関する研究の成果は、何よりもまず「はやりやまい＝疫病」への対処の指針として受け取られる。社会学の学問的な成果も、「長期間にわたる生活習慣（健康の場合／慢性疾患の場合の二つのケースあり）」を構築するための指針として活用されることは滅多にない。

社会的な事象は、一時的「ハヤリ」に過ぎないもの故、何よりも大切なのは対処の素早さ、このことに尽きる。したがって対処の仕方が場当たりのこと、一向に構わない。学問の日進月歩と対処の仕方の朝令暮改とは限りなく混同される。司馬遼太郎の観察：「今日からは民主主義だぞと大声で触れ回ると、民主主義になる」のである。

では「公立高校よりも私立高校の方が『一流大学』に進学できるチャンスは大きい」、という「学問的知見」を聞かされたとき、私たちは一体どう対処すればいいのだろうか。まずは一息入れること、次にこの命題が出現するチャンスを確認すること、調べてみると、前述のように生起確率は3割を越える程

度のことが多い。「予言」的中率はたかだか3割、ということは外れる可能性は7割あるということである。冷静に考えてみれば、外れる可能性の方が2倍以上大きいのである。

野球を例にとろう。3割バッターは打撃率のベストテンに入るほどの強打者である。チャンスで打順が3割バッターに回るとすれば、守る側のピッチャーとしては最大のピンチを迎えることになる。このとき、ピッチャーが打たれる可能性が3割もあると思ったら、大抵は打ち込まれてしまう。どんな強打者でも7割は打ち損じるものだと思って、バッターに対峙するのがいい、というのは「解説者」等の常時口にする、ありがたい「訓え」である。

社会学的「予言」に対しては、まずは外れる方に賭けてみるのである。意思決定を行なう際に、人間の知恵と工夫をもってすれば、どんな「予言」も外せないことはない、という「訓え」を思い浮かべ、自らに聞いて聞かせるのである。

社会学的「予言」に際会するとき、何故あえて外れる方に賭けなければいけないのか？

この問いに「合理的な」形で答えることは難しい。かつて福沢諭吉は「やせ我慢の説」を唱えたことがある。福沢が明治初年にあえて「やせ我慢の説」を説き起こしたのは、司馬遼太郎が感得した日本社会の特質に呼応するものであろう。日本国の「文明開化」が十全に展開し続けるには、日本人の多くが、世の大勢に逆って、「やせ我慢」という原則に則り意思決定をすることが大切である——これが福沢諭吉の「訓え」であろう。

今日の日本において「やせ我慢せよ」といっても、特に若い人の心を惹くことは出来ないだろう。社会学者の言説にであったとき、私が心の中で唱える魔法の呪文がある。それは次のような言葉である。

「これは個人の感想です」。

そう！健康に良いという食品・器具・施術等々の広告でおなじみの文言である。正確に言うなら、「個人の」という形容は正しくない。この文言に続く次の「注意書き」が大切なのである、この「感想」は「効果・効能をあらわすものではありません」。ここでもまた、健康や生活習慣病の研究へと触手を伸ばし始めた「疫学」のもたらす新しい知見と社会学の知識とはクロスするのである。